

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文 第13回:落語と私

この連載エッセイのごときものは、一回につき10枚という決まりなのだが、前回、何を思ったか、3回分に匹敵する30枚という膨大な分量を費やして、しょうもない新作落語を書いたりしたこともあって、今回は、軽く軽〜くいきたいと思う。肩の力を抜いて、のんびり、気楽に、だら〜と、ぐにゃぐにゃと。

さて、いつもいつも落語とSFに関する深遠なる蘊蓄を語っているこのコーナーだが、今回は、いかにして私、田中啓文が、落語とSFの冥府魔道に足を踏み入れることになったか、そのきっかけについて語りたいと思う。そんな個人的な話は聞きたくない？

なら、聞くな。私は痛くも痒くもこそばくも気持ちよくもない。私が落語という究極の娯楽に目覚めたきっかけは、まちがいに父親の影響である。私の父は、まだ幼い私に、どういふわけか「こっけい」とか「おも

しろ」とかそういった言葉のついた読み物ばかりを与えた。「弥次喜多道中記」や「ドリトル先生」「ガルガンチュア物語」「ドンキホーテ」などの子供向け翻案の類もあった。そして、私が小学校低学年になると、これまた何を思ったか、興津要(おきつかなめ)編の「古典落語」という分厚い文庫本(たぶん全5巻)を買い与えたのであった。私はこの本ですっかり「読む落語」にはまってしまい、小学校三、四年生にしては異常なほど落語に詳しい人間となった。

落語がラジオで放送されると、おんぼろのテープレコーダーに録音して、何度も何度も飽きもせず聞いた。テープを一本しか持っていなかったので、次の放送があると前のやつを消さなければならぬ。しかし、ある時、あまりにおもしろくて、消さずに置いておきたいという気持ちになった放送があった。それが、桂米朝師匠の「崇

徳院」だったのである(後年、東芝EMIの「桂米朝上方落語全集」で「崇徳院」を聞いた時、ラジオで聞いたのと同じ音源だということがすぐにわかった。細かい間が全く同じだったからで、そこまで覚えるほど聞き込んでいたのである)。

はじめて落語会というのに行ったのもその頃であろう。当時は、京橋だどこかのダイエーで行われていた「島之内寄席」で、もちろん親に連れていってもらったのである。というのも、トリが米朝師匠だったからで、これが私が桂米朝を生で聞いた初めての歴史的なできごとである。それも、最前列のど真ん中、かぶりつきで聞いていたのだ。何しろ25年以上も前のことなので、他の出演者はほとんど覚えていないが、米朝師匠の直前に、今は祝々亭船伝と名前が変わった桂春輔師匠が出ていたことははっきりと覚えている。知っている人は知っているが、

何しろああいう落語の人だから、子供心には強烈だったのだ(舞台を意味なく走りまわったりするのである。ネタも、シュール落語といってもいい、わけのわからない異常な新作で、たしかその時は、京都大原三千院に行くというネタをやっていた。今にして思えば「京都大原3980円」という新作だったのだが)、直後に出た米朝師匠が、マクラで春輔師匠の落語に触れたことも覚えている。私は、肝心なことは何一つ覚えることができず今日に至っているわけだが、こういったしょうもないことはどういうわけか克明に覚えているのである。米朝師匠は、トリで「京の茶漬け」をやった。これも覚えているのである。ところが、もう一つ覚えていることがある。これはできれば忘れたいような記憶なのであるが、私は、ネタがはじまるやいなや最前列のど真ん中でぐうぐうと眠りこけてしまい、気がついたときにはオチ

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文 第13回:落語と私

だったのである。師匠もさぞやりにくかったとは思いますが、まあ子供のことで、いびきもかかないし、怒りをのみこんで黙認してくれたのであろう(そういうえば、宝塚花組をみにいった時も、私は最前列のど真ん中で熟睡してしまった。だから、私は、私の本を立ち読みしながら書店で熟睡している人物がいても、決して怒らないつもりである)しかし、相手が米朝師匠でよかった。談志師匠なら、訴えられていたかもしれない。ともあれ、私は「将来人間国宝になる人物の高座の真っ正面のど真ん中で熟睡した人間」なのである。米朝師匠の著書に、ポプラ社から出ている「落語と私」ということも向けの読み物があるが、これが実にすばらしい内容なのである。これを読んで、私は、寝たことを大反省したのである。

はじめて自分の金で落語会にいったのは、たしか高校の頃で、東西落語会

のような催しだったと思う。ホール落語でかなり高く、もしつまらなかったら私はその時点で落語から(少なくとも生の落語から)足が遠のいていたにちがいない。これまた、出演者からネタまで克明に記憶している。そのことについて語りたいと思う。何? いつまでジジイの思ひで話を語っているのだ、そんな個人的な話は聞きたくない?

なら、聞くな。私は痛くも痒くもこそばくも気持ちよくもない。

前座が、笑福亭鶴瓶さんで、たしかネタは「商売根問」。たいへんおもしろく、私は以来、鶴瓶さんの噺家としての実力を信頼している。関西勢は、桂春団治「親子茶屋」と桂米朝「風の神おくり」、東京勢は金原亭馬生「鍬形(だったと思う。相撲ネタ)」と立川談志「黄金餅」。どのネタもすばらしく、私は綺羅星のごとき出演者の噺に引き込まれ、酔わされ、すごいすご

い落語はすごいとあらためて落語というものの面白さを確信したのだった。春団治師匠の「親子茶屋」は「つーろよ、つろよ、しのだの森の狐どんをつろよ」「あ、やっつくやっつくやっつくな」という箇所がすっかり気に入り、一緒にいった友人とともに翌日、学校で「やっつくやっつくやっつくな」と踊っていたのだから、その影響のほどもわからうというものだ(のんびりした高校だった)。米朝師匠の「風の神おくり」ははじめて聞くネタだったが、演者と楽屋が声をそろえて「かーぜの神おくる、かーぜの神おくる」という箇所がすっかり気に入り、一緒にいった友人とともに翌日、学校で「かーぜの神おくる」と叫んでいたのだから、その影響のほどもわからうというものだ(ほんとにのんびりした学校だった)。談志師匠の「黄金餅」は、翌日学校における影響こそなかったものの、開口一番「すごいメンバーだね。

客もいっぱい入ってる。でも、このメンバーで客が入んなきゃ落語なんて終わってるよ」と言ったのを聞いて「なんちゅうおっさんや」と思ったことまで覚えているのである。

この落語会と前後して、「枝雀寄席」の放送がはじまり、私はますます落語にのめりこんでいったのである。そして、時空をいきなり超えて現在に至るわけだが、ではSFのほうはどうかというと、これがまた、落語を好きになった小学校四、五年の頃とほぼ時をおなじゅうして好きになったのである。そのことについて語りたいと思う。何? いいかげんにしろ、個人的な話はするなと再三言ってるだろう?

なら、聞くな。私は痛くも痒くもこそばくも気持ちよくもない。

私はもともと幼稚園の頃から怪獣オタク(その頃、オタクという言葉はなかったが、テレビでウルトラシリーズの放送があると、タイトルと監督名、

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文 第13回:落語と私

脚本家名をメモし、あとで一覧表にするような小学生であった)だったが、四年生の頃、手塚治虫、石森章太郎、横山光輝……といったマンガにはまり、将来はマンガ家になる!と決めて日夜創作にはげんでいた。そんなある日、友だちが私に星新一という聞いたことのない作家の「気まぐれロボット」という文庫を差し出して、これはたいへんおもしろいから読んでみる、と言った。私は、その場でぱらぱらと読んでみて、「これはむちゃくちゃおもしろそうやから貸していらん。自分で買う」と宣言し、その日のうちに新世界にあるM書店に買いに走り、一読狂気、いや驚喜してすっかり気に入り、それ以来、発売されていた星新一の本をたちまち全部読んでしまった。「祖父小金井良精の記」まで読んだ。こういうものが他にないかとさがしまわり、見つけたのが筒井康隆の「にぎやかな未来」である。他に眉村卓の「C

席の客」、小松左京の早川から出ていた二冊のショートショート集(名前は忘れた)、豊田有恒の「イルカの惑星」、石川喬司の「アリスの不思議な旅」、広瀬正の「タイムマシンの作り方」などを鋭い嗅覚でもって探し当て、貪り読んだ。しかし、あつという間にそれらも読んでしまい、毎日、書店に行くのだが、もう当時出ていたショートショート集はほとんど読破してしまつたらしく、しかたなく短編集の中から比較的収録作品数が多いものを探して読んでいた。ところが、ある日、小学校の図書室で、私はポプラ社から出ている筒井康隆編の「SF教室」(奇しくも「落語と私」と同じシリーズである)という本を手にした。そのきっかけは、筒井康隆という人があのむちゃくちゃでおもしろい「にぎやかな未来」の作者だと思ったからであろう。その本を借りてかえった私は一読狂気、いや驚喜した。なんと、そこには

驚くべき事実が書かれていたのである。私が幼少時から好きだった怪獣も、手塚・石森マンガ(大好きだった「人造人間キカイダー」の冒頭に出てくるロボット三原則というのが、実はアイザック・アシモフという人が考えたものだ)と知ったときには本当に驚いた)も、ショートショートも、全ては、実は「SF」というジャンルに含まれるものだったのだ。私は知らないうちにすでにファンだったのだ。ああ、知らなんだ知らなんだ……というわけで、それに気づいたらもうあとはライク・ア・ローリング・ストーンである。ごろごろごろと坂道を転がり落ちるようにSF道まっしぐら。「SF教室」に載っていた「名作SF」を片っ端から探して読み、私は小学生の分際で「トリフィドの日」や「幼年期の終わり」「火星年代記」「フェッセンデンの宇宙」「宇宙商人」「宇宙の眼」「発狂した宇宙」「結晶世界」……などを読

むという経験をした。はっきり言って、なんのこっちゃさっぱりわからん、と思ったものも多数あったが、大学のSF研ではじめてこういった作品に接した人とはちょっとちがった読書体験の持ち主であるように思うのである。この時得た「なんかよくわからんけど、むちゃくちゃおもしろそうだな」と思った経験は、そののち現在にいたるまで影響を与えており、多少理解できなくても、いや、全く理解できなくても、なんとなくおもしろそうだなと思った作品については、「おもしろ」と考える人間になってしまったのである。その時の自分の理解力が足りないのを作品にせいにして、駄作と決めつけるようなことだけはしたくないものである。まあ、中にはほんまにわけのわからんものもあるが、それでもいいではないか。私が、ニューウェーブやワイドスクリーンバロック、音楽では前衛ジャズが好きなのも、「わけのわ

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第13回:落語と私

からんものの中のものすごくおもしろいものが隠されているのではないか」という気持ちが捨てきれないからで、それは小学校の時のSF読書体験がルートにあるのである。私は、その頃は書店になかったこの「SF教室」を、ノートに全文書き写すという暴挙も行っている。何ヶ月もかかったが、その過程で私はSF作家の名前や名作の名前を覚えていったらしい。え？ 感動した？ 昭和の勝海舟と呼んでいただいて結構ですよ。過去の傑作が出版社のカタログから消えており、最近のSFファンはそれらを読むことができないという声をたまに耳にするが、図書館に行きゃああるわけだし、「ファン」というものは自分が読みたいもの、見たいもの、聞きたいものについては努力を惜しんではいけません。

何？ じじいの説教はもうたくさんだ、えらそうなことを言うな、最近のSFなんかまるで読んでいないくせ

に？ そうです。そのとおりです。私が最近のSFを二ヶ月に一冊ぐらいしかフォローしていないことは認めましょう。しかし、私は思うのだが、SFという文芸がかつての一時期私にあれだけの衝撃、超弩級の衝撃を与えてくれたという事実だけで、私ば「よし」としているのである。そのショック体験だけで、私は一生SFを書き続けることができるし、その原点は小学校から高校にかけての頭から足の先までSF漬けだった時の読書経験にあるわけで、だからこそ私は今でもSFファンだと胸をはって言えるし、SF大会にも行くし、SF専門誌にも原稿を書くのである。SFのことを馬鹿にされたりすると、自分が最近読んでいない事実は棚にあげて、むちゃくちゃ腹がたったりするのである。

これで、私と落語、SFとの遭遇についておわかりいただけたかと思う。

では、次に私がいかにしてジャズ

ファンになったか、と、私がいかにして料理好きになったか、と私がいかにして宝塚ファンになったかについて縷々述べたいと思うが.....何？ 個人的な話はもうやめよ？ 聞きたくない聞きたくない？ あんた、チャントリのカシラか。まあ、そう言われたらしかたがない。かなり酔っぱらっていたことだし(書き始めるとともに、オーシャンホワイトを飲みだし、今、ちょうど半分ほど飲んだところである)その話はまたいつか。いやいや柄にもなくすっかり昔話をしてしもうたわい。げほげほげほ。

(文中敬称略)